

## ヨーロッパ諸語における『数』の表現

Expression des nombres dans les langues européennes

下 宮 忠 雄  
Tadao SHIMOMIYA

世界の文明語の大部分は十進法 (decimal system) を用いる。印欧祖語も十進法であったと推定され、現代のヨーロッパ諸語も、大抵は十進法である。しかし、ケルト諸語、バスク語、(ヨーロッパに入るかどうか問題だが) コーカサス諸語は二十進法 (vigesimal system) を用いる。「13」のような場合、ten-three の順序 (現代ギリシア語、ジブシー語、エスペラント語) と、three-ten の順序 (英語、ドイツ語、ラテン語、古典ギリシア語、サンスクリット語、ロシア語) とがある。通常の数詞のほか、商業上の特殊な dozen, score, gross など好まれる。ロシア語は「40」の場合、'four-ten' 式の語がなく、sorok という特殊な語を用いる。基数 one-two-three と序数 first-second-third の間に見られる整合性、数詞と名詞の組合せなど、問題点を、以下10項目に分けて考察する。

1. 十進法を用いるのは印欧諸語、セム諸語、チュルク諸語、フィン・ウゴル諸語 (日本語、中国語も) などである。チュルク語族の場合、遠隔のシベリアに行なわれるヤクート語 (Jakutisch, 人口25万) も十進法であることをサンスクリット語学者 Otto Böhtlingk がすでに1851年、その Über die Sprache der Jakuten (St. Petersburg) の中で示している。ヨーロッパで二十進法を用いるのはバスク語、ケルト諸語 (7. 参照) であるが、フランス語 (soixante-dix, quatre-vingts, quatre-vingt-dix), デンマーク語にその名残が見られる。

バスク語の例: 20 hogeï, 30 hogeïtahamar (<hogeï-eta-hamar 20+10), 40 berrogeï (<berr-hogeï; berr-は「2倍」), 50 berrogeïtahamar (<berrogeï-eta-hamar 40+10), 60 hirurogeï (<hirur-hogeï 3倍 20; hirur 3)。バスク語は独立した「百」の語 ehun をもっているが、これは古くから、かなり高度の文化をもっていたことの証拠である。「千」mila と「百万」milioi はラテン語からの借用である。約20, 約30 (スペイン語 unos veinte, unos treinta) などは hogeien bat, hogeïtahamarren bat のように言う (-en は属格語尾)。

デンマーク語の例: 50 halvtredsindstyve (<halv-tred-sinds-tyve  $2.5 \times 20$ ; sind 「倍」, tyve 20), 60 tresindstyve ( $3 \times 20$ ), 70 halvfjerdindstyve ( $3.5 \times 20$ ), 80 firsindstyve ( $4 \times 20$ ), 90 halvfemsindstyve ( $4.5 \times 20$ )。

二十進法はコーカサス諸語にも見られる (ロシア語の影響で十進法に移行したものもある)。コーカサス諸語のうち最大の文明語であるグルジア語 (Georgian, 言語人口330万) はきれいな二十進法を示している。30 oc-da-ati ( $20+10$ ; oci 20, da および, ati 20; oc-i, at-i の -i は主格語尾), 40 or-m-oci (ori 2, -m- は meți 「より多く」より), 50 ormoc-da-ati ( $40+10$ ), 60 sa-m-oci (<\*sam-m-oci  $3 \times 20$ ), 70 samoc-da-ati ( $3 \times 20+10$ ), 80 otx-m-oci ( $4 \times 20$ ), 90 otxmoc-da-ati ( $4 \times 20+10$ ). 100は独立の語 asi をもち, 1000は at-asi ( $10 \times 100$ ) という。

2. 11と12については、ゲルマン諸語は特別の表現をもつ。ゴート語 11 ainlif, 12 twalif は、それぞれ「1あまり」「2あまり」の意味で、後半に印欧語根 \*leikw- (ギ leipein 残す) を含んでいる。他のゲルマン語も同様である。バルト諸語は11から19まで、この方式を用いる。リトアニア語 11 vienúolika, 12 dvýlika, .....19 devyniólika。

11=10+1, 12=10+2の順序は日本語、エスペラント語 (dek-unu, dek-du), その子孫の意味の人工語であるイド語 (Ido) も同様, 11は dek e un, 12は dek e du という。ラテン語 undecim, duodecim, 古典ギリシア語 héndeka, dódeka, サンスクリット語 ekadaśa, dvadaśa はいずれも 1+10, 2+10の順序, ジブシー語 (サンスクリット語の一分派) は逆に deś yek, deś dui という。ラテン語と同系統のウンブリア語は 12 desen-duf (10-2) を示している (Carl D. Buck: Elementarbuch der oskisch-umbrischen Dialekte. Heidelberg 1905, p. 87)。

13~19は、英語 thirteen, fourteen..... のようにゲルマン語, ロマンズ語では 3-10, 4-10, .....の順序となる。たとえば, 15はラテン語 quindecim (quinque-decem), 古典ギリシア語 pentekaídeka (5+10) であるが, 現代ギリシア語では dekapénte (10-5) のように逆になる。逆の順序はサンスクリット語→ジブシー語の場合に見たとうりである。16, 17, 18はロマンス語の内部で興味深い転換を示す。

16: ラ sēdecim → イ sédici, フ seize (以上 6-10), ス dieciséis, ポ dezasseis (以上 10-6), ルーマニア語は次項参照。

17: ラ septendecim (7-10) → イ diciassette, フ dix-sept, ス diecisiete, ポ dezassete (以上 10-7)。

18: (ラ duōdēviginti “two from twenty”) → イ diciotto, フ dix-huit, ス dieciocho, ポ dezoito (以上 10-8)。

スペイン語・ポルトガル語では16から10-6の順序となる。

3. ラテン語 18 duō-dē-viginti, 19 ün-dē-viginti は, 20-2, 20-1 の意味である。同様に 28 duōdētrigintā, 29 ündētrigintā となる。減数法はフィンランド語 8 kahdeksan, 9 yhdeksän にも見られ, それぞれ kaksi 2, yksi 1 の語幹 kahte-, yhte- と「10」の組合せからできている。同系のズイリェン語 (Zyryan) 8 kykja-mys, 9 ok-mys には -mys 「10」(cf. njelja-mys 40, vety-mys 50) の語が明瞭に見られる (J. Szinnyei: Finnisch-ugrische Sprachwissenschaft. Leipzig 1910, p. 110)。

4. 11から19までは、バルト諸語で1あまり, 2あまり, のように言うことは2で述べたが, スラヴ諸語では “one-on-ten”, “two-on-ten” のように言う。ロシア語 11 odin-nad-cat' (-cat' <desjat' 10), dve-nad-cat' など。古代教会スラヴ語にすでに 11 jedinü na desęte, 12 düva na desęte..... のように, いわば生の語形が出ている。ブルガリア語, ルーマニア語, アルバニア語にも共通で, バルカン現象の一つである。ル 11 unsprezece (spre<ラ super), 12 doisprezece; ア njimbëdhetë (nji 1, mbi 上に, cf. ギ amphi, dhetë 10), 12 dymbëdhetë。アルバニア語は40に katërdhetë (4・10) と並んで dyzet (2×20) をもっている。

5. 21から99までは, “one-and-twenty” 式のものドイツ語, オランダ語, デンマーク語に見られる。古典ギリシア語には heis kai eíkosi (1+20), eíkosi kai heis (20+1), eíkosi heis (20・1) の3通りあるが, 現代ギリシア語は eikosiéna (20・1) と言う。古代英語も one-and-twenty 式であったが, フランス語にならって

twenty-one となった (フ 21 vingt et un, 22 以下は vingt-deux のように)。ノルウェー語は 1951 年以後 twenty-one の順序に改められたが、年配の人は、デンマーク語式に one-and-twenty という。

6. 40は、東スラヴ語 (ロシア語, ウクライナ語, 白ロシア語) では, sorok という特別な語を用いるが, これはドイツのスラヴィスト Max Vasmer によると「黒テン (英 sable, ド Zobel) の毛皮 40枚の束」を意味する (Russisches etymologisches Wörterbuch. Heidelberg 1953-58)。他のスラヴ語は, ポーランド語 czterdzieści, ブルガリア語 четирideset のように 4・10 と言う。英語 score は品物を数える際に, 20 ごとに木に刻み目をつけたことによる (three score and ten 70 が有名)。dozen や gross も商業用語から来ている。デンマーク語 snes 「20個」は枝を切り取って, 20個づつニシンなどの品物を束ねた習慣から来たもので, ドイツ語 schneiden (切る) と同じ語根を含んでいる。100はゴート語 hund, ラテン語 centum, ギリシア語 hekatón, サンスクリット語 śata-m, 古代教会スラヴ語 sūto などすべて印欧祖語 \*kmtóm に由来している。1000の場合は, ゲルマン語 (thousand), バルト語 (tūkstantis), スラヴ語 (ty-sjat') が共通し, ラテン語 mille (<\*smi-ghsl-i), ギリシア語 khílioi (<\*ghesl-jo-), サンスクリット語 sa-hásram (<\*sm-gheslo-m) が別のグループを作っている。古代ノルド語 hundrað は 120, tvau hundrað は 240 を表していた。同様に thúsund は 1200, tvær thúsundir は 2400 だった。

7. ケルト諸語は, 印欧語族の中ではめずらしく二十進法で, 古代アイルランド語 tri fichit fer “60 (3×20) men”, 中世アイルランド語 nóí fichit 180 (9×20) のように用いられ, 近代アイルランド語, スコットランド語において規則的な二十進法が発達した (Lewis-Pedersen: A Concise Comparative Celtic Grammar. Göttingen 3. Aufl. 1974, p. 192)。ブルトン語でも, これが急速に発達した (daou-ugent 40=2×20, tri-ugent 60=3×20)。ちなみに, ブルトン語で 50 を hanter-kant “half-hundred” という。ヨーロッパに散発的に見られる二十進について, ドイツのケルト語学者・印欧語学者 Julius Pokorny (1887-1970) は鐘形杯民族 (Glockenbecherleute, Beaker Folk) が所有していたものであるという。彼らは紀元前 1900 年以後, 中部ヨーロッパへ移住してきたアルメノイド系民族である (Die Sprachen der vorkeltischen Bewohner Nordwesteuropas. Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft. Sonderheft 15, 1962, pp. 129-138)。

8. 基数と序数との整合性: ラテン語 ūnus-duo-trēs→prīmus-secundus, alter-tertius, フランス語 un-deux-trois→premier-deuxième-troisième, 英語 one-two-three→first-second-third, ドイツ語 eins-zwei-drei→erst-zweit-dritt, ロシア語 odin-dva-tri→pervyj-vtoroj-tretij を比べると, 「第 1 の」は「一番前の」の意味に由来し, 「第 2 の」は「次ぎに来るべき」(ラ secundus “which is to follow), 「別の」(ラ alter, 古英 other, ロ vtoroj), 「第 3 の」以降は基数から作られる。フランス語とドイツ語は「第 2」以降, 基数からの派生となる。スペイン語は序数に貧しく, décimo, undécimo, duodécimo (第 10, 11, 12) までしかなく, 第 13 以降は基数を用いる。「20世紀」はスペイン語では el siglo veinte, ポルトガル語でも o século vinte という。英語 fourth, fifth, sixth, ドイツ語 viert, fünft, sechst などの -th, -t はラテン語 quārtus, quintus, sextus の -tu-, ロシア語 četvŕtyj, pjatyj, šestoj の -ty- と同源で, 一種の強調辞である。

9. 数詞の要求。“five houses” のような場合, ラ quinque domūs, ギ pénte oikíai, フ cinq maisons, ド

fünf Häuser のように名詞は複数になるが、ロシア語では *pjat' domov* で複数属格、フィンランド語では *viisi taloa* で単数分格 (partitive) となる。ハンガリー語 *öt ház*, トルコ語 *beş ev* は単数のままとなる。

ロシア語の場合、数詞 2, 3, 4 の後では名詞は単数属格に置かれ、5 以上の場合は名詞は複数属格に置かれる。ゴート語では 20 以上の数詞とともに用いる名詞は複数属格に置かれる (*fimf tigjus jērē* 50年)。古代ノルド語では *atta vetra gamall* (eight winters old, 8歳) のように、比較的小さな数から名詞を複数属格に置く。ラテン語は *mille hominēs* (まれに *mille hominum*) 1000人, *duo milia hominum* 2000人, のようになる。“many books” のロシア語 *mnogo knig* は名詞の複数属格、フィンランド語 *paljon kirjaa* は単数属格である。

10. 動詞の数。主語の名詞が単数であるか複数であるかによって、動詞も単数・複数が用いられる (数の一致)。ゴート語、ギリシア語、サンスクリット語では双数 (dual) も残っている。ゴート語 *nim* (私は取る), *nimōs* (私たち 2 人は取る), *nimam* (私たち 3 人以上は取る) のようになる。バスク語の場合、目的語が単数の場合と複数の場合で、動詞の語形が異なる。I have a book. は *Liburu bat dut.* であるが、I have two books. は *Bi liburu ditut.* で、「私を持っている」*dut* が目的語複数の場合 *d-it-ut* のように *-it-* が挿入される。

まとめ：数詞は言語材 (Sprachgut) のうちでも最も基本的な部分であり、これなしに 1 日を過ごすことは、ないのではないと思われる。印欧祖語の数詞のうち、1 から 100 までの数が、5000 年間、その生命を保ち続けて今日にいたっていることが、何よりの証拠である。ケルト諸語における二十進法のような改進 (innovation) があつたり、ギリシア語における “five-and-ten” から “ten-five” (15) のような順序の変更が見られたり、古代ノルド語における “hundred” = “great hundred” (120), “thousand” = “great thousand” (1200) のような例はあるが、印欧語族は、概して、統一性をよく保っている。語形的には、分化の比較的浅いチュルク諸語の場合よりも、相違が大きいのではあるが。口頭発表の際にも述べたことだが、ラテン語の 18 と 19 が、20 マイナス 2, 20 マイナス 1 というのは、(3. において述べた、数体系の貧しかったウラル系のような言語ならいざ知らず) 理論的なローマ人にしては意外である。この点、Ferdinand Sommer (*Handbuch der lateinischen Laut- und Formenlehre*. Heidelberg 1914, p. 467) は「18, 19 の場合、古くから行なわれていた複合形式が、よき時代に *duodeviginti, undeviginti* = “2, 1 von 20 weg” にとって代られた」と書いている。よき時代とは西暦紀元前 1 世紀のラテン文学黄金時代を指すのであろうが、その原因については触れられていない。数詞の貧富が言語によっていかに異なるかは、言語年代学 (glottochronology) において用いられる、Swadesh らの基礎語彙を見ると、なるほどとうなずける。100 語のリストには *one, two, three* の 3 語しかなく、200 語のリストでは、これに *four, five* が加わり、5 語となる。215 語のリストになって、ようやく 6, 7, 8, 9, 10, 20, 100 の計 12 の数が登場する。

#### 参考書目：

Pott, F. A.: *Die Sprachverwandtschaft in Europa an den Zahlwörtern nachgewiesen*. Amsterdam 1971 (Halle 1868).

Schmidt, W.: *Die Sprachfamilien und Sprachenkreise der Erde*. Hamburg 1977 (Heidelberg 1926).

Szemerényi, O.: *Studies in the Indo-European System of Numerals*. Heidelberg 1960 (これは残念ながら利用できなかった)。